

第69号「強制疎開から80周年記念号 旧島民の証言」 (令和6年12月1日発行)

本年は小笠原諸島の島民が1944年に強制疎開させられてから80周年という節目の年です。

戦争の激化とともに、軍属として徴用された825人を島に残し、6,886人がほとんどすべての財産を島に残して慣れない内地へと疎開することを余儀なくされたのです。

生活手段や食料も限られ、小笠原に比べ寒冷な内地での生活は過酷なもので、疎開後9年が経過した1953年5月の新聞報道によると、慣れない地での過酷な疎開生活によるストレス、病気などにより147人が死亡、18人が一家心中・自殺により亡くなられたと報じられています。

疎開生活は23年間（硫黄島旧島民は未だに帰島できません。）も続いたので、疎開が原因でお亡くなりになった方々はもっと増えていることでしょう。

このような過酷な疎開生活を経験した世代の皆様は80年が経過して多くがお亡くなりになり、また、ご存命の皆さまも時の経過とともに高齢化しているため、今後は直接お話をお聞きできる機会はなくなってくるでしょう。

本号は、このような悲惨な歴史が時の経過とともに風化し忘れられることが無いよう、強制疎開を経験した旧島民の皆さまからの聞き取りによる証言や体験談の寄稿をまとめて記録し、長く保存していくために作成いたしました。

